

学びの楽しさを、指導しましょう。

石井康雄（前船橋市立金杉台小学校 校長）

Q

1年生「おなじ かずずつ」で、この時期にふさわしい指導するには、どうしたらよいでしょうか？

A

教科書P115にある問題は3年生のわり算の問題に該当するということで、省略したり、教科書に軽く触れるだけにしたりする先生方もみられます。しかし、学習指導要領解説を見返してください。教科書の問題は、確かにわり算の素材に見えますが、1年生のこの時期の指導は、数の構成と表し方に関する数学的な活動を通して、具体物をまとめて考えたり、等分したりして整理し、表すことになります。そもそも1年生の算数の学習は算数学習の基礎的基本的な内容になっていますので、数についての感覚を豊かにし、乗法や除法を考える素地を養う必要があるのです。したがって、教科書に書かれていることを丁寧に指導しましょう。一方で、教科書以外の部分（わり算の指導）へ踏み込むような指導は控えましょう。

Q

1年生「たすのかな ひくのかな」で、この時期にふさわしい指導するには、どうしたらよいでしょうか？

A

ここでは、数についての感覚を豊かにするために、1時間の学習の中で、加法か減法のいずれかの式になる演算決定を意図した問題を解かせるようになっています。指導の順は、加法と減法どちらを先にしてもかまいませんが、いずれも④に式がかいてあるので、初めから見せないようにして、子供自身に考えさせましょう。ここで大切なことは、問題文を読んで、なぜたし算になるのか、ひき算になるのかという、立式の根拠を説明させることです。説明の際は、教科書にあるように、数図ブロックを使用させ、立式の理由と答えの出し方を発表させましょう。加法と減法を一通り学習した1年生のこの時期に、はるさんやエマさんのような、式とその理由をしっかりと説明させることで、2年生へのなだらかな移行が可能になります。

Q

1年生「100までの かずの けいさん」では、計算の楽しさをどのように指導したらよいのでしょうか？

A

第18単元の「大きい かず」との比較をしましょう。「大きい かず」では、数を数え、表すことが中心でしたが、この単元では、計算して答えを求めることが中心です。したがって、問題文を読ませ、聞かれていることを式に表現させます。そして、その式の見方を、数え棒で表現させ、計算のしかたを考えさせていきます。この学習のしかたを定着させることで、この単元の学びの楽しさを指導することができます。つまり、10のまとまりがいくつといくつでいくつになるとか、10のまとまりがいくつとばらぐいくつでいくつになる、という考え方です。特に、P120は「40と30で70」や「70は20と50」のような何十という数の合成に該当し、P121は「20と6で26」や「34は30と4」というような何十何という数の構成そのものに該当します。このように、この単元は、指導の流れが明解なため、子供たちが主体的に学べるよう構成されています。子供の側に立つと、問題文を読み、数え棒で考え（数え棒がなくても念頭操作で捉え）、式を立て、答えを求める一連の流れがつかめると思います。単元の導入時では、学習の流れが十分に理解できない子でも、単元後半には、学習の流れがわかり、より主体的な学習が出来るようになります。

なお、こういう単元では、終始一貫して、同じ教具（数え棒）を使用するようにしましょう。今日は数え棒、今日はお金の模型、今日は…といった教具の使用は、工夫した指導のように思えますが、子供の混乱を引き起こしますので避けましょう。子供たちは、毎時間同じことの繰り返しでも十分楽しさを感じ取ることができますし、この指導のほうが学びを深める（確かな定着、心の残る学習）指導になると考えます。

Q

1年生「おおいほう すくないほう」の長文読解では、どのようなことに気をつけて指導したらよいのでしょうか？

A

この単元では、いわゆる求大・求小と言われる、一方の数量と2量の差から他方の数量を求める問題に取り組みます。問題文が長文になっていますので、学級の実態にふさわしい提示の仕方を考えましょう。問題解決型の学習展開は、問題把握、自力解決、比較検討の順で進んでいきますので、どのようにして問題を把握させるかを考えましょう。問題把握の段階での挿絵や数図ブロックの有無で、問題文の読解に差が出ますので、どちらも丁寧に指導していきましょう。

ブロック有りの場合は、一斉指導の中で問題文を読ませ、挿絵を見せ、挿絵どおりに数図ブロックを置かせます。そして、その数図ブロックどおりに式を立てさせ、答えを求めさせる学習展開となるでしょう。順序立てて一斉指導をしていけば丁寧な指導になりますが、1年間のまとめとして、2年生への移行を考えると、このような指導で、思考力・判断力・表現力を育むことが、十分にできるかは疑問が残ります。また心に深く刻む指導という点でもいかがでしょうか。そのため、どのように指導したら、思考力・判断力・表現力を育むことになるかを、検討しましょう。

ブロック無しの場合は、子供たちに主体的に学習させるようにします。初めに問題文を読ませ、わかっていることと聞いていることを確認させます。次に、式をつくらせ、その式にした理由を数図ブロックや絵で表現させてから答えを求めさせます。そして、教科書で今日の学習を振り返り、子供たちの学習の成果を確認していくという、心に残る問題解決型の指導の流れになります。ここでも、どのような思考力・判断力・表現力を育んだのかを、確認しましょう。

学習形態を上記のどちらかに固定せず、子供たちの実態によって、単元の前半では有りの場合の指導を多くとり、単元の後半では無しの場合の指導をする方法もあります。この両者が混在した指導方法が一般的です。深く心に刻む指導はこの他にもあると思います。子供たちが個々の目標を達成できる指導を行うようにしましょう。

